

教の自由問題は、自由抑圧の戦前こそ意識されるべきものであったが、全般的に仏教団体はこの問題を権力にすることがよって保障してもらふ姿勢をとった。結局この「土下座性」は信仰自体を歪曲する道であったことを肝に銘じておかねばなるまい。信教の自由を守り、平和を護る闘いが共通の基盤に立っていることを著者は指摘する。

近代仏教の「百年河清」はいつか。仏教革新運動や教団民主化運動、及び平和運動に至るまでの動向を考察しているが、この点は妹尾義郎氏とも親しく接し、また運動にも参画してきた著者ならではの指摘がしばしばみられる。

特に教団民主化運動挫折の要因を、米占領軍の植民地支配体制の基本方向がつかめず、表面的な民主化政策に甘い幻想を抱いていたこと、教団民主化は役職のポストを握ることによって出来るものではない。教団の経済的基盤への理解の不足、民主化活動と平和運動と関連させ、仏教利用政策へ対決しなかったこと、「絶対主義天皇制のもとでその侵略イデオロギーに毒された仏教理論に容赦のないメスがふるえずにしまった」こと、寺院形態と教団のあり方への具体的方向づけの不足、等に求めているのは示唆的である。ただ、教団民主化運動や妹尾氏の実践及び仏教徒平和運動を前掲の目的に沿って、どのように相互に関連づけて

いくべきなのか、著者が教団民主化と平和運動をいかに結合させて展開すべきだと考えているのかの高説を聞きたい所である。また著者の批判する仏教徒のうちにある、「あれもこれも」性、ウヤマや中道論、社会認識の不充分さは信仰の主体性を維持するためにも大切な批判であろう。

教義的側面を近代の歴史状況下で明確にし、また教義の歪曲修正が如何に教えの真精神と教団の歴史的任務をねじ曲げ権力に追随利用されることになったか、という思想的側面について今後稿を改めてまとめられるようお願いしたい。わが教団の各聖も本書の内容を直視され、教団の民主化と再生への指標となさるようお奨めしたい。著者の意図を充分理解できず勝手な意見を述べてしまったが、ご寛恕願いたい。(アポロン社刊)

石川 康 明

## 中山法華経寺史料

中 尾 堯 編著

本書は中世における中山法華経寺及びその末寺の關係資

料（一部は近世初期に及ぶ）を集録したもので、①文書の部、②造像銘の部（付仏具銘等）③板碑、④曼荼羅本尊の部、⑤記録の部の五部より成っている。

編者は中世における中山法華経寺とその教団を中心に、中世日蓮宗の展開を追求している研究者であるが、はしがきによれば、昭和三十三年以来千葉県下を中心に関東一円の史料探訪を行ない、関係の史料の殆どを採録し終ったという。いわば実地踏査によって得た史料集で、「造像銘」ひとつをとりに上げて、中山法華経寺・唱行寺・安国寺・常運寺・妙光寺・妙福寺・上行寺・日本寺の八箇寺十六点の記録をとっており「板碑」については百五十余、「曼荼羅本尊」については約百七十点に及んでいる。これらの記録の集成によって、今後の研究に資するものは大である。

本書の三分の二を占める「文書の部」では中山法華経寺関係の他、下総の諸寺、京都本法寺、同頂妙寺、佐賀県松尾光勝寺等十二箇寺にわたって採録しており、原本の体裁をできるだけ忠実に表記している。これらのものには、従来知られているものもあるが、編者は原本と一々照合したようである。

さて、これらは日蓮宗が社会に定着して行く過程を知る

好個の史料であり、編者の努力に敬意を表するものであるが、なかんづく、「中山法華経寺文書Ⅱ」に集録されている「雙紙要文」「紙背文書」等は重要である。これらは、日蓮聖人が直接筆を執られた「雙紙要文」「天台肝要文」「破禅宗」「秘書」のそれぞれの紙背にある書状等を集録したものである。「天台肝要文集」紙背にある建長五年十二月九日の富木殿御返事はすでに昭和定本日蓮聖人遺文に掲載されているが、本書では、直接関係のあるなしに拘らず、紙背文書をすべてとりあげている。これらによって、日蓮聖人の社会的背景にアプローチする手掛りを見出すことができるかも知れない。

本書は一本山・末寺についての史料集としては最初のものであるが、そればかりでなく、以上のような性格によって日蓮宗教団史、広くは日本宗教史の上からも意義をもつものである。

なお、編者の言によれば、貴重な史料が焼かれた直後にぶつかったこともあるということである。先師の貴重な記録は法統相続の歴史を伝えて行く上からも大切にしたいものである。（吉川弘文館刊）

渡 辺 宝 陽